

## ■ 令和5年度 第1回SSH運営指導委員会

- 1 実施日時 令和5年7月6日(木) 14:00 ~ 16:00
- 2 実施場所 本校 視聴覚教室
- 3 出席者 【運営指導委員】川井 浩史 神戸大学内海城環境教育研究センター特命教授 委員長  
大野 照文 高田短期大学特任教授 副委員長 オンライン  
会沢 成彦 大阪公立大学大学院教授  
中西 敬 徳島大学環境防災研究センター客員教授  
西岡 加名恵 京都大学大学院教授 欠席  
【管理機関】山田 尚史 兵庫県教育委員会事務局高校教育課 指導主事  
【本校】校長 伊藤聖二 教頭 森田光彦 名手健二 事務長 山下ひとみ  
主幹教諭 難波 滋  
教諭 平島拓真 小山卓也 奥村久志 出田享佑 福田秀志 谷良夫 中井大樹  
村上一寿 福本 稔 浅井尚輝 佐々木智之 実習助手 石崎陽子

## 4 協議の概要並びに運営指導委員による指導助言の内容

### (1) 本校のSSHのこれまでの取組について

校長：新たな校内組織として9名体制の探究推進部を設けた。

委員ら：今年度SR科課題研究のテーマ設定で自主的な興味に応じている点は良い。その場合の研究期間は1年では短く、半年くらい前からテーマ設定の準備をした方が良い。文献調査や専門家への相談等を通して、先行研究がないか、現実的にうまくいくか、見極める時間が必要である。／テーマ設定をする際には、先行事例の情報収集がさらに必要である。／どの学科も、テーマ設定を適切にできているか気にしてほしい。先行研究の調査は、何かやろうというときに、どんなことができるか参考にするために行う。まずやってみることが必要。その点上手くいっている班も見られる。／高校として大きなテーマ・目標を設定してはどうか。シェアド・リーダーシップとは、あるプロジェクトのこの部分はある班が別の部分は別の班が担うことで、育っていくものかと思う。

校長：他校では先輩の研究を引き継ぎ、学校独自の研究を進める例が見られる。本校ではどうか。

教員：先輩の研究を引き継ぐという面では、過去の論文集を参考に、研究テーマを決める例も見られる。

委員ら：大事なことは科学について探究し、腑に落ちる経験をすることで、将来科学を動機づけになる。

探究する感覚を身に付けてほしい。／成果の普及はどのようにしているのか。

教員：普及啓発として、高校生サミットで探究活動としてやってきたことを他の高校に伝える。その他せねばならないこととして、探究指導マニュアルの作成に向けて、今年度動いている。

委員：今年度は異動が多いので、教員間で交流し、情報交換をしてほしい。

委員ら：SSHへの教員配置が増えてできた余裕を共有して、生徒の探究力を育成する観点でも考える時間として活用してほしい。尼崎小田高校の成功事例を伝えるのは良いが、どの学校でもできるものが求められる／探究推進部ができたことは、多学科学連携の面でシェアド・リーダーシップによく合っており、画期的である。

校長：それぞれの学科が何をしているのか情報交換し、共同でできることなど、横の連携をより行いたい。

委員ら：どの学科についても、探究を通して論理的思考力を身につけてほしい。人間社会で生きていくには、論理的に考え、主張できることが必要で、他の人の発言や研究を評価する時にも基礎となる部分でもある。／過去に大きく変わった事例として、Ⅱ期に机上でやっていた生徒を船に乗せて神戸港の周りを走ると、面白い発想も出てきた。自由な発想があっても良い。

### (2) 今後のSSH活動について指導助言

委員ら：尼崎小田は地域を支えていく拠点になるというところが一番大切なポイント。地域に根差した活動をするのが正解だと思う。／教員がフラットに皆でディスカッションできる場をたくさん設けてほしい。生徒の探究活動をメタに見られるような力をつけるような、教員の教育システムも管理した尼崎小田をつくり、SSHを支えられる教員を輩出するような高校を目指してはどうか。／研究する時は最初から論理的な訳ではなく、様々なデータを集めて、これをどう並べるときちんとして論理になるか考える。様々なことをやってみて、手元に揃えておくことが必要である。

## 5 兵庫県教育委員会による指導助言内容

SSH事業で生徒を育てるだけでなく、メンバーを入れ替えることで教員を育ててほしい。

普及については、人事異動があったのだから、他校の取組の交流で良いと考える。学科や類型間で交流やテーマ設定について話し合ったり、そういう機会をどんどん作れば、尼崎小田ならではの深化ができるのではと考えている。

## ■ 令和5年度 第2回SSH運営指導委員会

1 実施日時 令和6年2月3日(土) 16:00 ~ 17:00

2 実施場所 本校 会議室

3 出席者 【運営指導委員】川井 浩史 神戸大学内海城環境教育研究センター特命教授 委員長  
大野 照文 高田短期大学特任教授 副委員長  
会沢 成彦 大阪公立大学大学院教授  
中西 敬 徳島大学環境防災研究センター客員教授 欠席  
西岡 加名恵 京都大学大学院教授  
【管理機関】長坂 賢司 兵庫県教育委員会事務局高校教育課 主任指導主事  
【本校】校長 伊藤聖二 教頭 森田光彦 名手健二 主幹教諭 難波 滋  
教諭 平島拓真 小山卓也 奥村久志 出田享佑 福田秀志 谷良夫 中井大樹  
村上一寿 福本 稔 浅井尚輝 佐々木智之 実習助手 石崎陽子

## 4 協議の概要並びに運営指導委員による指導助言の内容

### (1) 本日の研究発表会について

校長：1年生が良い着眼点で質問をしていた。中間評価は管理機関が高評価であった。咲いテク事業や理系専門のALTの配置などが評価されているのだと考えている。

委員ら：テーマが個人的で生徒のやりたいことが尊重されている。担当教員の専門外のテーマのときにどうするかが、今後の課題である。また、チームで動かすプログラムを考えていく必要がある。／高度な分析手法を使う前に、実験データを自分で確かめて欲しい。／普通科発表は情報の密度が上がった印象である。今年の論文の研修会を踏まえ、自分の達成し得た売りの部分をきちんとアピールできるように論文作成を指導して欲しい。発表会を聞くと、中間評価より良い印象である。学校としてももっとアピールできるかもしれない。指摘事項については、マニュアルの公開やシェアリーダーシップの育成、評価のノウハウの普及、他教科の連携を進めて欲しい。

委員：研究班によってはテーマ設定に時間がかかりすぎて、実験が遅れた班もあったのではないかな。

教員：テーマは7月に決まったが実験内容の練り直し等に時間を要した。

委員：時間があればもっと実験を進められた印象だったが、試行錯誤を経験できたのなら良かったと思う。

教員：テーマが面白いという話だが、科学的な方向へシフトした方が良いのか、方向性を知りたい。

委員：何のテーマでも良い。成果を求めるよりは、過程の中で科学的な方法論を学べれば良い。生徒が1年間興味を失わなければ、結果は伴わなくても良い。ただし、本人が面白くても、他人にひとり合点だと思われぬような指導をする必要がある。無理に先行研究のある高レベルのことをする必要はない。興味を持ちながら論理性を身につけるように。生徒が生き生きやっているのは良い。

校長：楽しくやるのが良いと考えている。今年度新たに赴任した教員に意見を聞きたい。

教員：生徒が失敗を恐れていたので、失敗しても構わないということを伝えたい。

委員ら：研究者は思い通りに行かなかったとき、失敗と考えない。思い通りの結果が出ないことが分かったと考える。／思い通りでないデータを活かす方策を探ると良い。もう一度興味をもって進むと面白い。

校長：実験には失敗という概念がない？

委員ら：ただし、やり方が正しいことが大前提である。やり方が適切でなかったら、結果ではない。／自分の思い通りに行かなかったが、論理的に違う結果がでてきたときが一番面白い。

教員：授業では問いに対する答えがあるが、探究は間違えても良いと言われるので、生徒は戸惑っている。

委員：うまく間違える必要がある。全然結果が出ていないのに、これが結果だと言われると困る。緻密にして、概念もしっかりして、実験も条件統制して出てきた失敗は、むしろ発見である。

(SR科、国際探求学科、看護医療・健康類型より今年度の探究活動の取組の概要説明)

### (2) 本校のSSH事業の取組について

教員：今後の展開をどうすればよいか。

委員ら：重点枠の取組を広げ他分野でも、高校間連携のハブになれば、オリジナリティがある。／生徒が探究活動を自分事として捉え、可能性を探る指導をしてほしい。／実践がうまくいっているかどうかは、教員が目指すことがうまくできているかである。生徒がやりたくてやっている点が良い。学校の成果やノウハウのまとめ方が課題。／今後の展開は、研究成果と生徒の試行錯誤のどちらを追うかで変わる。

## 5 兵庫県教育委員会による指導助言内容

長年の取組の中でアップデートしており、新たな教員が活性化をもたらすことを期待している。探究活動については成果だけではなくプロセスが大切だと伝えてほしい。プロセスの示し方については、県教委として本校の取組をさらに発信したい。阪神地区、特に南地区の中核校と位置付けて本校を支援する。